

民俗芸能の心

# われは水軍

——ごごしま松山・興居島の船踊り——



# 「踊り、島の若者達は」

黒崎 洋一

記録映画監督

四国、松山の離島、興居島には、今も「若衆宿」の精神が残っている。「若衆宿」とは、かつて四国の里にあった大人への通過儀礼のための空間である。大人への旅立ちを控えた少年達は、ある期間、若衆宿に共同で宿泊し、生活し、そのプロセスを経て大人になる。しかし、今すでにこの空間はなく、通過儀礼の重要さを伝える精神だけが、興居島の島人達の心の中に残っているのだ。



瀬戸内に浮かぶ興居島遠望

僕達は興居島の船踊りを、ほぼ2年にわたって撮影したが、その時間の中で、一番強く感じたのが、興居島に残る若衆宿の精神だった。

ホーエラエ（風帆栄や）ヤサソラエー（弥栄や）ケラマッカセ（気乱巻かそ）と音頭をとりながら、太鼓をうち、ダンマリで歌舞伎調の踊りを展開する船踊りは、興居島の中央にある船越和気比売神社の秋の大祭に奉納される踊りで、かつて、風をまき波をくぐり、瀬戸の海を力強く船漕ぎした伊予水軍のイメージがモチーフとなっているだけに、力強く、しかも勇壮な踊りである。

映画には、この船踊りにかける世代をこえた様々な人々が登場する。その柱となるのは、一生懸命船踊りを覚えようとする少年と、その少年を叱咤激励しながら踊りを教え、後継者を育てようとする青年達と、踊りの音頭をかけ、太鼓をうち、踊りの心を伝えようとする古老の姿がある。少年に船踊りを教えていく島人達の表情は真剣で、あの若衆宿の精神を今に彷彿とさせる。そして、祭りの日、少年はさなぎから蝶に変身する。この少年のさなぎから蝶に変身する瞬間を、是非、映画「われは水軍」の中で見て欲しい。更に、踊りを教えていく若者達や古老の表情を見て欲しい。映画の中で、通過儀礼を経て、少年がさなぎから蝶に変身する美しさ、その少年を育てる大人達の心が見えてくるはずだ。



海賊の手下役に選ばれた坂本和久君（中学3年生）、稽古にも一段と熱が入る

# 「ふるさとの伝承を 肉体に刻む祭りの賦」

高橋 秀雄

日本伝統芸能研究所長  
白梅学園短期大学教授

瀬戸内の海の夕風は、まるで動きを忘れてしまったような静けさの中にある。しかし、風が起り雲が走り、潮が息をはじめると、その潮騒が遙か昔の瀬戸内の海の記憶を語り始める。

その物語の中心に据えられるのは、誇らしげな伊予水軍の栄光。中世後期からは村上水軍が海の領主として名を残すが、それ以前の源平合戦の頃から水軍は活躍している。

四国松山から2キロ先の海上にある興居島の島人は、自らを伊予水軍の末裔と言い伝えてきている。それが「興居島の船踊り」を生み出したのである。

瀬戸内海の各地には、權伝馬船を競う海の男たちの祭りがある。權伝馬船の船先では梵天を振って踊り、艫では剣權をかざして踊る。また、海路の交易とともに都の文化が流れこみ、江戸を代表する歌舞伎が瀬戸内にも根付いた。小豆島の歌舞伎舞台はよく知られているが、その島の内海町で踊られる「安田踊り」は、歌舞伎役者が振り付けたという伝承を残している。

“ダンダカ、ダン、ダン、ダン”と打ち鳴らされる太鼓と拍子木のリズムも、淡路島の「大久保踊り」に共通している。

このような瀬戸内海の文化を巧みに組み合わせ、興居島の氏神和氣比売神社の秋祭りの祭礼芸能として、海上に設営された船舞台で豪快に踊られるのが「興居島の船踊り」なのである。

同じ太鼓のリズムを繰り返し、パントマイムで演じられる「船踊り」には、六法を踏み、見得を切る歌舞伎荒事の振りがよく似合う。

歌舞伎から採った演目もあるが、「船踊り」には、海賊を退治する「伊予水軍」がもっともふさわしい。

先輩たちの指導を受けて懸命に稽古する若者の姿がほほえましい。そして晴れ舞台で演じる役者に、瀬戸内の波が伊予水軍の誇りをそっとささやきかける。



緊張のなかでカツラをつけてもらう阪本君



和氣比売神社で祭神の魂入れをした、神輿が島を練りあるく



海岸で演じられる「船踊り」には、島外からも大勢の見物客が訪れる



興居島の中学3年生坂本君は、船踊りで海賊の手下役を演じた(左側)



船踊りの打ち鳴らす太鼓、拍子木の勇ましいリズムは、松山市の「伊予水軍太鼓」にも取り入れられ今に伝えられている



興居島船踊保存会での演目は「紅葉狩」が演じられた



各地区の神輿は船で、島の中央の船越と気比売神社に集まる



神輿が島を練りあるく

作品名：シリーズ〈民俗芸能の心〉

## 「われは水軍」

——松山・興居島の船踊り——

(35mm/カラー/33分)

〈国の記録選択民俗文化財指定〉

企画：(財)ポーラ伝統文化振興財団

製作：(株)日経映像

監修：高橋秀雄

### 製作スタッフ

制作・小谷田 亘

佐藤 哲夫

監督脚本・黒崎 洋一

助監督・日向 正典

撮影・大木 大介

寺沼 範雄

撮影助手・小林 泰治

望月 紀彦

円城寺哲郎

照明・松橋 仁之

語り・佐藤 慶

音楽/効果・山崎 茂之

原版編集・井上 正司

タイトル・鶴岡 秋育

録音・東京テレビセンター

現像・IMAGICA

### 撮影協力

文化庁

小富士文化保存会

興居島船踊保存会

船越と気比売神社

中巖前神社

坂越船渡御祭保存会

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

## 財団法人ポーラ伝統文化振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階

TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597